

## 論文の内容の要旨

氏名：坂下 将人

博士の専攻分野の名称：博士(芸術学)

論文題名：Ф.М.ドストエフスキー『悪霊』－「鳥」に関する一考察

博士論文は、卒業論文、修士論文に引き続き、Ф.М.ドストエフスキー(1821-1881)の五大長編の一作である『悪霊』(Бесы)(1871-1872)を研究対象とする。博士論文は、『悪霊』論の「第三部」に該当するため、卒業論文並びに修士論文における研究成果と理解を前提とする。

ドストエフスキーは作中人物を「動物」に例える手法で、自らが創造した作中人物の「本質」を表現する。『悪霊』の作品舞台である「スクヴォレーシニキ」(Скворешники)は、「椋鳥」を意味する **скворец**、「椋鳥の巣箱」を意味する **скворечник** に由来するが故に、『悪霊』に登場する作中人物達は皆「擬鳥化」され、「鳥」に見立てられている。本論文は、『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている描写を指摘する方法によって、作中人物達が作品内において「鳥人」、「有翼人」として描かれている特徴を「例証」し、ドストエフスキーが『悪霊』の原題選定時に「天」、「天国」、「空」を意味する“небо”を念頭に置き、небо を“небог”、небеса であると解釈した結果、『悪霊』の原題に選定した бес を、「神」を意味する бог に「対置」・「対比」される「悪魔」として理解していた事実を「論証」すると同時に、卒業論文において構築した上記『悪霊』の原題選定理由に関する仮説の正当性を「立証」することを目的とする。

以下、各章各節の内容について端的に論及する。第一章「先行研究」では主に日本国内においてなされた『悪霊』の「先行研究」についての考察を行った。第一節「『悪霊』先行研究の概略」では『悪霊』が国内ではじめて翻訳(重訳)された1915年から2020年までの間に行われてきた『悪霊』研究の現状を把握・分析・整理・体系化し、日本国内における『悪霊』の「先行研究史」を作成して概観を提示した。第二節「年代別『悪霊』先行研究の概評」では『悪霊』の先行研究業績を年代別に分類し、『悪霊』の先行研究業績の論旨について個別に論及した。第三節「年代別『悪霊』先行研究の特徴」では各年代における『悪霊』先行研究業績の特徴を抽出・列挙・図表化した。本論文において採択した『悪霊』の先行研究数は合計234件であるが、入手できなかった文献も存在するため、本論文における『悪霊』の先行研究業績の紹介は完全ではない。しかし、国内において行われた『悪霊』の先行研究業績を総括・精査した研究業績は日本国内には存在しないが故に、本論文第一章「先行研究」は国内における『悪霊』研究全体に寄与する実績として結実したと自負している。なお、採択した先行研究については原則として表題に『悪霊』と銘打っている研究業績、あるいは論稿内において『悪霊』に対する考察・言及の占める割合が多い研究業績に限定した。先行研究については今後も継続して調査・収集を行い、追加・増補していく予定である。第四節「Ф.М.

ドストエフスキーの文学作品における「鳥」の象徴性」では清水正と Бершадская, С.А の言説を所与として、本論文における研究の意義と独自性について論及した。『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている特徴を指摘した研究業績は、日本国内には存在しない。しかし、先行研究を『悪霊』に限定せず、『罪と罰』へと拡大すれば、清水(正)が『宮沢賢治とドストエフスキー』において、『罪と罰』の「女性登場人物達」の多くが「鳥」に象徴されている特徴を指摘している。また、国外の先行研究に目を向ければ、Бершадская が *Почему у Достоевского "чужики так и мрут" (символика орнитологических именований)* (「なぜドストエフスキーは「結局鷺も死ぬのだ」という表現を用いるのか(鳥類の学名の象徴性)」)において、ドストエフスキーの文学作品における「鳥」の象徴性、並びにドストエフスキーの文学作品に対する「鳥学」、「鳥類学」視点での研究の重要性について指摘している。前述したように、日本国内においてなされた『悪霊』の先行研究において、『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている特徴を指摘した研究業績は存在しない。従って、『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている特徴を具体的に指摘・例証した研究業績は、日本国内における『悪霊』の研究史上、本論文が「初」となる。

第二章第一節「**небо** に対する神学的考察 二」では修士論文第二章第二節「**небо** に対する神学的考察」に引き続き、「正教徒」であるドストエフスキーが信奉していた「正教会」の神観・宗教観・世界観・死生観・人間観を踏まえた上で、**небо** に対する考察を「神学的に行った。第二節「**небо** に対する神話学的考察」ではロシア人の **небо** に対する理解を明らかにするために、「神話」に手がかりを求め、栗原成郎『ロシア異界幻想』を立脚点として **небо** に対する考察を「神話学」的に行った。**небо** に対するロシア人の表象は「宗教」並びに「神話」が土台となる。従って、第二章「**небо** に対する神学的及び神話学的考察」では「神学」的及び「神話学」的考察を通して、**небо** を“**небог**”(не(нет)+бог)として解釈できる論拠を思料・提示した。

第三章『悪霊』における「鳥」は本論文の「核」となる。第一節「作中人物達に対する考察」では『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」され、「鳥」に見立てられている描写を指摘する方法によって、『悪霊』の作中人物達が作品内において「鳥人」、「有翼人」として描かれている特徴を「例証」した。『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている特徴を「例証」できれば、「鳥」と **небо**(「天」、「天国」、「空」)は「不可分の関係」にあるが故に、ドストエフスキーが『悪霊』の原題選定時に“**небо**”を念頭に置き、**небо** を“**небог**”、**небеса** として解釈した結果、『悪霊』の原題に選定した **бес** を、「神」を意味する **бог** に「対置」・「対比」される「悪魔」として解釈していた事実を必然的に「論証」できる。『悪霊』の作中人物達が作品内において「擬鳥化」されている描写を指摘した、本節における一連の例証の正当性については、首肯點頭して頂けると確信している。第二節「作品舞台「スクヴォレーシニキ」に対する考察」では「椋鳥の巣箱」として命名・設定された『悪霊』の作品舞台に「椋鳥」が存在せず、また「椋鳥」に見立てられた作中人物が一人も存在しない理由について、「椋鳥」が「檄文」を意味し、「檄文」が「椋鳥」に見立てられているからで

あると指摘した。本節における知見は、『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている描写を明らかにし、「例証」する過程で得られた「副産物」である。本節における一連の考察は、『悪霊』の作中人物達が作品内において「擬鳥化」された描写に対する研究の重要性を改めて明らかにした。第三節「「ピョートル」と「アントン」に対する考察 二」では卒業論文第四章第四節「「ピョートル」と「アントン」に対する考察」に引き続き、「政府(国家)直属の秘密工作員(秘密諜報員)」である「ピョートル」と「アントン」について考察を行った。『悪霊』の「登場人物」の一人であると同時に、「語り手」でもあるアントンは『悪霊』において最も重要な作中人物の一人であるにもかかわらず、アントンの名字は作品内において「頭文字“Г”」とだけ表記されており、明示されていない。しかし、『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている特徴を明らかにできれば、アントンの名字 Г が「ホオジロガモ」を意味する **Гоголь** に由来していると推察できる。つまり、アントンのモチーフの一人はドストエフスキーに多大な影響を与えた作家の一人である「ニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ゴーゴリ」であり、「ゴーゴリ」の名字である **Гоголь** は「ホオジロガモ」を意味するが故に、アントンは「ゴーゴリ」と「ホオジロガモ」の両方に重ねあわせられている。本節では「ゴーゴリ」の他に、アントンの名字“Г”の候補者になり得る人物として、「元分離派教徒」と同時に「パーヴェル・プルスキーの弟子」でもある「コンスタンチン・エフィーモヴィチ・ゴルボフ(ゴルベフ)」とピョートル一世の最初の妃であるエヴドキヤと愛人関係を結んだ「ステパン・ボグダノヴィチ・グレボフ」の二人を挙げ、アントンの名字“Г”が「ゴルボフ」(「ゴルベフ」)の名字である **Голубов(Голубев)**、並びに「グレボフ」の名字である **Глебов** に由来すると考察した。アントンの名字“Г”が **Голубов(Голубев)** だった場合、「ゴルボフ」(「ゴルベフ」)の名字である **Голубов(Голубев)** は「鳩」を意味する **голубок(=голубь)** に由来するため、アントンは「ゴルボフ」と「鳩」の両方に重ねあわせられている。『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている特徴に則れば、アントンの名字 Г も「鳥」を象徴し、「鳥」に関連する語に由来していると判断しなければならない。『悪霊』の作中人物達が「擬鳥化」されている特徴は、アントンの名字 Г に備わる謎の解明をも可能にする。第四節「「エルケリ」に対する考察」では「ピョートルの唯一の弟子」である「エルケリ」について考察した。エルケリは作品内において「ニコライ」として機能し、作品世界から「不在」となるニコライにかわって、ニコライに課せられ、ニコライが果たせなかった役割を遂行している。従ってエルケリは、「ニコライの代役者」であり、「作品世界においてニコライの担う役割をニコライにかわって果たすために造形された人物」である。作中人物達が「擬鳥化」された本作品の特徴に鑑みれば、シャートフの連行・殺害時の場面において、「エルケリ」と「五人組」との間で「笛」を用いて行われた「意思疎通」は、「エルケリ」並びに「五人組」が間接的に「擬鳥化」されて描かれている特徴を示す描写の一つであると判断できる。